

ヴィエンチャンでの出家体験からみる僧侶の戒律と生活

安松 弘 毅*

はじめに

「ラオスで出家して僧侶になったよ。」

もともと長髪でドレッドヘアーにしていた私の、突然の坊主頭と鮮やかな橙色の袈裟姿の写真は、私のインスタグラムで非常に“インスタ映え”し、過去最多の「いいね!」を獲得した。そして、髪をまた伸ばすのか、もう日本に帰ってこないのか、結婚はできるのか、肉は食べられるのかといった質問が寄せられた。

確かに、出家して僧侶になること、それも東南アジアの上座部仏教国で行なうと聞けば、長期間現地に住み、骨を埋める覚悟で厳しい修行生活をするのだらうと思われるのも無理はない。学部時代にタイやミャンマーへの留学を経験した筆者にとっては、橙色、黄色、深い赤色の袈裟を着る僧侶たちは見慣れていた。とはいえ、僧侶に対してうっかり無礼な行為をしてしまうことを恐れ、無意識に距離をおいていたようで、彼らの生活や考え方についてはよく知らないままだった。しかし、仏教は、ラオスやその周辺地域での文化の基盤である。ラオスでは最短1日から出家が可能であるため、ラオス文化への理解、

そして言語学習にうってつけだろうと考え、出家を決めた。

これから語る出家までの流れと、出家生活の中で体験した僧侶の世俗性は、ラオス人に語るといやな顔をされる内容だ。一般人の想像する「質素、儉約、禁欲」といった僧侶像、あるいは特に厳しい寺院の僧侶の生活とはかけ離れているからである。しかし私は僧侶たちと同じ生活を送ることで、ラオスの社会や文化を理解しようとしていたに過ぎない。もちろん、首都の一部の寺院での経験に過ぎず、ラオスの寺院や僧侶全体に当てはまるわけではないが、ここでは筆者の3週間の出家生活での実体験を記したい。そして、見慣れているが馴染みのない、僧侶たちに対して親しみを感じて頂ければ幸いである。

出家まで

ラオスへの渡航後、現地に知人のいなかった私は、出家に関する情報収集に勤しんでいた。ラオス人と知り合って二言目には、出家がしたい、と切り出すようにしていた。コミュニケーションが苦手な私にとっては、会話を広げるのにも役立った。そんな日々を

* 京都大学大学院アジア・アフリカ地域研究研究科

送っていると、

「托鉢をしたことがありますか？」

と声をかけてくる学生と出会った。彼は、幼い頃の虐待が原因で家族と縁を切り出家していたらしい。大学入学を機に還俗はしているものの、今でも頻繁に寺に遊びに行くそうだ。寺との関わりが深い彼に、出家希望の旨を伝えた。

「だったらまずは、今度僧侶たちと地方に遊びに行くけど来ないか？」

今まで距離をおいていた僧侶たちと遊ぶチャンスが巡ってきた。

当日、僧侶を10人ほど乗せたバンが出発した。最初に止まったのは、道端の食堂だった。昼ごはんらしい。ここで彼が、神妙そうにこう語った。

「僧侶と在家は、一緒に食事をとってはいけない。僧侶が食べ終わったら、私たちも食べていい。」

なるほど、僧侶との遊びには気をつけることが多そうだ。と思った矢先、

「でも、私たちは友達だから、一緒に食べても大丈夫だ。」

そこからしばらく車を走らせ、ついたところは川だった。袈裟を脱ぎだす僧侶たちは、沐浴するのと思ったが、川に飛び込んで遊び始めた。一方で、袈裟をきれいに巻き直している僧侶たちは、自撮り棒につけたスマホをつかって自撮りを始めた。粗食なはずの彼らの筋肉質な身体、電子機器の所有率を目の当たりにした私は、出家する覚悟を決めることができたのだった。

出家当日

気を引き締めるつもりで、日本から持参した甚平を着て得度式に臨んだ。得度式とは、剃髪し俗世を捨て、出家する儀式だ。住職が読経しながら丁寧に剃髪してくれるのだろうと思っていたが、住職は昼寝中だった。出家を見に来てくれた友人たちが集まったところで、ひとりがおもむろにバリカンで私の髪を剃り始めた。聞けば、家で剃ってから寺に来ても良かったらしい。4年程維持してきた長髪を剃り落とすのだ、という私の覚悟とは裏腹に、剃髪の儀礼的な重要性は薄いようだった。剃り落とした髪は、還俗まで寺の木の根本に置かれた。釈迦がその下で悟りを開いたとされる、インドボダイジュの木だった。

剃髪が終わると、次は授戒だ。僧侶になるにあたって守らなければならない戒律をパリー語で復唱することで授かり、袈裟をまとう。授戒のために、再び住職の部屋を訪ねたが、返事がなかった。大学4年生の僧侶が住職の代わりに授戒を行なってくれたのは、



写真1 剃髪は出家経験者のラオス人の友人が躊躇なく行なってくれた。

さながら写真撮影会といった、和気あいあいとした雰囲気であった。この後、眉も剃り落とした。

住職が外出をしていたことがわかった2時間後のことだった。

20歳以下あるいは出家したばかりの、いわゆる見習い僧が授かるのは、十戒（殺生をしない・他人のものを盗まない・女性に触れない・嘘をつかない・お酒を飲まない・装飾品を身に着けない・音楽を聞かない・ベッドで寝ない・正午以降は食事をしない・お金に触れない）だ。

守られない戒律

僧侶としての生活で最初に実感した戒律は、不殺生だった。私が寝泊まりすることになった部屋は、トイレと水浴び場があり、水を貯めている桶から発生した蚊が部屋中を飛び回っていた。ラオスの蚊はデング熱やマラリアを媒介する恐れがあり、普段であれば、すべて退治して眠りにつくところであるが、僧侶としてはどうすべきだろうか。殺さないように蚊を防ぐ対策を考えていると、廊下からバチバチという音がした。電撃殺虫ラケットの音だった。托鉢で喜捨される食事の中にも肉や魚は含まれるが、これを食べることも許されている。つまり、不殺生戒は、自ら手を下すことが禁じられているが、やむをえない場合は仕方ない、という解釈のようだ。

数ある戒律の中で私が最も恐れていたのは、食事制限だ。戒律では正午以降の固形物の食事が禁じられている。午前中は、托鉢で得たもち米やおかずを食べることができるが、午後は同じように托鉢で得られる豆乳やインスタントコーヒーでしのぐのだ、と教わっていた。実は、午後の空腹に耐えられな



写真2 夜明けとともに始まる托鉢は裸足で行なう。ラオス人僧侶たちは慣れたものだが、私の足裏は毎朝悲鳴を上げていた。

ければ、予定よりも早く還俗してしまおうか、と考えていた。空腹に慄きながら掃き掃除やほかの僧侶たちとおしゃべりをしていたら、夕方になった。すると、カットフルーツや、ロティというクレープのようなデザート、アイスクリーム等、さまざまな屋台が寺院の中まで入ってきて商売を始めるのだった。空腹の僧侶たちの寺でそんな商売を、と思いきや、小さな子どもの僧侶が、果物屋だ！お金もってるか！と、連れて行ってくれた。僧侶のための学校でも、併設の食堂や周囲の商店では串焼きやお菓子など軽食が僧侶向けに売られており、午後の休み時間や放課後には、腹を空かせた僧侶たちが買い食いにやってくるのである。

特に都会の寺院は10～25歳くらいの僧侶が多く、修行のための施設というより学生寮的な性格をもっている。このような寺院では、厳しい修行を積み、悟りを開くことよりも、子どもたちの勉学や健康を重要視する方



写真3 托鉢で得られた食事を4つのテーブルに分配し、10人程度で囲んで食べる。

残ったものは、貧しい人々に分け与えるか、寺に住む犬や猫、地域の家畜の餌にする。

針を採っている場合が多い。また、夜中には住職が音楽を聞きながら散歩しているし、僧侶たちの通学にはスマートフォンとイヤホンが欠かせないし、日常的にお金を使って買い物をするのである。

守られる戒律

実質的に緩和されている戒律がある一方で、厳しく守られている戒律も存在する。僧侶としての生活で特に気を遣うのは、女性に触れない、という戒律だ。僧侶自身や、僧侶の着る袈裟であっても触れてはならず、触れてしまうと僧侶だけでなく女性の徳も下がるとされる。買い物などで物のやり取りでは、相手が女性の場合、テーブルや周囲の男性の手を介さなければならない。バスやソノテオ（公共交通機関としての乗り合いトラック）の乗り降りでは、女性と十分な距離を取って座ったり、間に男性が座ったりと、それぞれが自発的に動くことで僧侶の席を確保

するのだ。特に袈裟は大きな布でできているため、うっかり女性に触れてしまわないよう振る舞いに気をつける必要があった。

禁酒も厳しく守られている戒律である。若い僧侶はもちろんのこと、高齢者や住職もきちんと守っている。この戒律は本来、「人を惑わせる、陶醉させるものを禁ずる」という教えの解釈によるものである。その一方で、喫煙習慣のある僧侶は学生から高齢の僧侶まで、一定数存在する。明確に禁じられていないのだから大丈夫だという主張と、当時は煙草がなかっただけであり、飲酒と同様喫煙も慎むべきだとの主張が存在している。そのため、寺の方針や、僧侶の年齢によって扱いが変わるようで、特に学生に対しては生活指導的な意味も含めて禁煙とするところが一般的である。しかし、学生か高齢かにかかわらず、僧侶として人目に付くところでの喫煙は慎むべきという共通認識はあるため、彼らは寺院内の物陰で喫煙するのである。

時代とともに変わる僧侶の生活

僧侶による戒律の順守に影響する要因として、信仰以外にも、以下の2点が考えられる。ひとつは、世間体だ。僧侶は在家者の喜捨を受けることで生活を成り立たせている。厳しく戒律を守り生活する僧侶に対する尊敬の念が在家者に喜捨をさせているのであり、僧侶の世俗的な行動を在家者に見られては僧侶としての威厳が保てない。また、女性に触れると女性の徳も下がるとされるなど、在家者の不利益になるような行動もできないだろう。

2つ目は社会経済的事情である。ラオスでは経済的に困窮している家庭において、跡取りのための長子を除く、次男以降の男子が出家することが一般的であった。しかし実際の僧侶たちの話を聞くと、家計に負担をかけず首都の大学や僧侶向けの学校へ進学、そして就職することが出家の主な動機となっているようだった。私の出家中にも、多くの僧侶が大学卒業後、就職が決まったことで還俗していった。そして彼らは自分で生活していくのに十分な貯金が貯まるまでは、寺の手伝いなどをしながら寺に住み続けるのである。つまり彼らにとって出家は、生活手段のひとつという側面もある。そして、寺院は学生寮のような役割とともに、卒業後に自立した生活が送れるようになるまでの就職支援の役割を併せもつようになってきた。このような寺院の役割の変容を受け、学生の僧侶が健康的に成長し勉学に励むことができるよう、実質的に戒律が緩和されているということだ。住職が、僧侶たちの午後の食事や、寺院周辺での屋台の商売を黙認するのは、これに起因すると思われる。

最近、住職会議では日常的に喜捨を行なう在家者の減少が議題に挙がっているという。私が毎朝回っていた托鉢ルートでは7~8組の一般世帯と、20人弱の役所関係者が喜捨をしてくれていたが、これは全盛期の1/10



写真4 膨大な量の経を暗記し、寺のために真面目に働く彼らも、自由時には無邪気に遊ぶ普通の子どもである。

に過ぎないらしい。またヴィエンチャン郊外にある、世間と離れて生活する林住部の寺院では、周辺に民家が多数存在するにもかかわらず、僧侶を満載したトラック2台で往復1時間かけて街に行き、喜捨を受けなければならなかった。いまのところ僧侶たちの食事は十分に賄うことができている。しかし余剰がなければ、寺院で働く貧しい人たちや、彼らの飼う家畜の餌となる分が確保できなくなってしまう。寺院は、僧侶になる以外にも、地域の社会経済的弱者のセーフティネットとしての役割も担ってきた。

ヴィエンチャンの僧侶たちは、在家者の信仰の希薄化や寄進の減少のもと、世俗的な生活の希求と、俗世を離れて修行に専念するための戒律の狭間で、時代の流れにどう対応していくかが問われているのである。

ゴレ島におけるダークツーリズムの実情

十文字 樹*

ゴレ島行きの船を待っていると、隣の椅子には赤と黄のカラフルな布をいじる50代くらいの女性がいた。目が合ったので話をするとゴレ島で土産物屋を開いているらしい。「島でこういう服を売ってるから、ぜひ来てね。」これから待ち受けるであろう恐怖体験を前に、私はその緊張をいくらか解きほぐされた。

ゴレ島とダークツーリズムについて

私が向かったゴレ島は、アフリカ大陸最西端のセネガル共和国に位置し、首都ダカールの港から船で20分ほどのところにある小さい島である。1時間ほど歩いてまわれるゴレ島は、16～19世紀にわたって黒人奴隷貿易の拠点として使われていた [Maillat 2018]。この島の見どころは「奴隷の家」と呼ばれる黒人奴隷の収容施設であり、現在でもその建物を見物することができる。このような歴史的経緯からゴレ島は世界遺産として認定されており、旧宗主国であったフランスをはじめ、ヨーロッパやアメリカなどから観光客がやってくる。

観光研究では、死や災害など負の遺産に対する関心から誕生した観光を「ダークツーリズム」と呼ぶ [Foley and Lennon 1996]。日



写真1 船から見るゴレ島

本では広島原爆ドームなどの戦争関連の施設や、自然災害の痕跡がダークツーリズムの場として有名である [親泊 2012: 140]。このようなダークツーリズムは、悲しさの継承だけではなく歴史的な学習の機会を提供する。また、観光地における「ゲスト」の発言から「ホスト」のアイデンティティが創造されるなど、観光活動は大きな社会的影響力をもっている [太田 1993]。そのため歴史的背景から生まれるダークツーリズムはホスト・ゲストの両者の文化に対して重大な影響を与えられられる。

したがって、ゴレ島は黒人奴隷貿易の拠点だったことからダークツーリズムの観光地とみなすことができ、歴史の学習はもちろん、辛く悲しい過去を語る「ホスト」の役割やその文化形成を観察することで、ダークツーリズムと社会関係について新たな知見を得るこ

* 京都大学大学院アジア・アフリカ地域研究研究科

とができるかと推測した。

しかし、緊張したまま船に乗り込んだ私は、これから待ち受けるであろう恐怖とはちぐはぐな光景を見ることになった。熱い接吻を交わす若いカップル、島の解説の交渉をもちかけるガイドたち。歴史的なダークツーリズムの観光地とはいいながら、「ダーク」一辺倒ではないのではと思わせられた。

ゴレ島の「ブローカー」

ゴレ島に着き、観光庁の男性から「ベストガイド」と紹介された男性と落ち合うとさっそく「奴隷の家」へ向かった。そこには既に観光客が集まっており、神妙な面持ちでメモを取る人もいた。「ようこそゴレ島へ。ここが、奴隷たちを収容していた『奴隷の家』です。」それまでの会話と語調を変え、ガイドが解説を始めた。6畳ほどの小部屋に10人以上の男性が収容されていたこと、2階で生活する「白人」が夜になると若い女性を「品定め」していたこと。このほかにもさまざまな凄惨な歴史を丁寧に話してくれた。しかし、その語りは淡々としていた。私がしばらく眺めていると、ガイドがもうひとりの観光客を連れ、再度解説をした。「ようこそゴレ島へ。ここが、奴隷たちを収容していた『奴隷の家』です。」一言一句違わぬ解説は、遊園地のアトラクションを思わせた。

その後ガイドに先導され島内を歩くと、売店へ案内された。売店といってもひとつではなく、幅1メートルほど、高さ2メートルほどの柵をひとりの女性が切り盛りする売店が20ほど密集する売店群であった。私が到

着すると店員である女性20人が次から次へと商品を見せ、安くするから来いと腕を力強く引っ張った。私が値下げ交渉している間、ガイドは顔見知りの店員たちに商売の調子を尋ねていた。

売店から離れ、40分ほど歩いたものの、私が期待するような語り部はおらず、予想していた想像を絶する恐怖も「奴隷の家」を除いて聞くことはなかった。ガイドに料金を渡し、別れを告げるとガイドはこう切り出した。「ゴレ島の外でも、観光で助けが必要ななら連絡してください。」男性はゴレ島に限らず、セネガル他地域の観光地の案内も生業としていた。この日も車で6時間ほどかけて次の観光地へと向かうことになっていたらしい。男性はチップを受けるとそそくさと船に乗ってしまった。

ゴレ島の観光を支える人々は現地住民の「ホスト」ではなく、島外からの「ブローカー」であった。彼らにとってゴレ島は、悲しみの場以上にビジネスの場であった。

ゴレ島のゲスト

歴史を知ることができるスポットは「奴隷の家」に限られない。例として砲台が挙げら



写真2 客のいない歴史博物館

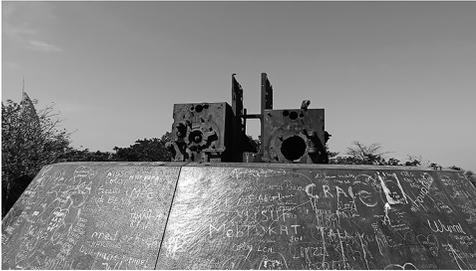


写真3 落書きで埋め尽くされた砲台

れる。これは、ゴレ島が要塞としての機能を有していた際の遺物であり、直接触れることもできる。しかし今ではその表面がハート形や名前など、観光客による落書きで埋め尽くされている。このほかにも、歴史博物館やネルソン・マンデラが涙した高台が挙げられるが、そちらでは船上で見かけた観光客を見かけることはほぼなかった。どうやら「ゲスト」は歴史の学習以外にも目的があるらしい。

ぬぐい切れない違和感を抱えたまま波止場へ向かうと、美しい浜と海が広がっていた。そこには整備されたビーチがあり、椅子やパラソルも用意されていた。その近くには、ピザやパスタなどを楽しめるレストランもあり、そこでようやく観光客たちを見つけることができた。レストランは満席になり、ビーチでは水着姿で日光浴を楽しむ観光客もいた。

私がゴレ島に求めていた価値は凄惨な過去を学ぶことであった。しかし「ゲスト」はそれ以外にも価値を見出ししており、「ブローカー」もまたその要求を満たすことで利益を得ていた。私が想定していたものとは、大きく異なった「ダークツーリズム」がゴレ島にはあった。

ゴレ島のダークツーリズムの形

ゴレ島は確かに凄惨な歴史の舞台であった。アフリカのさまざまな地域から集められた奴隷たちは、二度と生誕の地を踏むことなくここから船に乗せられていった。しかし、それは2世紀前の話であり当時を経験した人はいない。

現在のゴレ島はその歴史を認めつつ、その歴史に限られない観光を開発していた。「ブローカー」であるガイドは歴史を伝える役割を負い、それを終えると「ゲスト」を別の「ブローカー」たちに渡した。「ゲスト」は「奴隷の家」で歴史を受け止め、その後は美しい風景とバカンスを楽しみ、歴史を感じる一方でポジティブな思い出もつくっていた。そして現在を生きる「ホスト」は「ゲスト」との接触はなく、「ゲスト」が通らないエリアで生活をしている。

ダークツーリズムは悲しい過去を追体験し、手を合わせるだけがそのすべてではないようだ。現在を生きる人々に利潤を与え、思い出づくりの機会を提供しうる。ゴレ島は私が抱いていたダークツーリズムの枠組みを打ち崩し、社会関係の新しい切り口を見せてくれた。

現在のゴレ島の姿は、凄惨な過去とともにその乗り越え方を伝えているのかもしれない。

引用文献

- Foley, M. and J. Lennon. 1996. JFK and Dark Tourism: A Fascination with Assassination, *International Journal of Heritage Studies* 2(4): 198-211.
- Maillat, M. 2018. *Gorée au fil du temps Gorée*

Phoenix des Tropiques. Dakar: Association des Amis du Musée Historique du Sénégal (Gorée).
太田好信. 1993. 「文化の客体化—観光をとおした文化とアイデンティティの創造」『民族学研

究』57(4): 383-410.
親泊素子. 2012. 「Dark Tourism 試論『負の遺産は観光資源になり得るか?』」『江戸川大学紀要』22: 139-148.

イエティをめぐる複数の語り

石内良季*

ブータンのイエティ譚

「あれはちょうど私が生まれてから干支が2周した(24歳)くらいの頃、インドとの国境につながる道路の建設をしていた時さ。¹⁾ 道路を作るために集めていた水が雄のイエティに毎晩飲み干されるもんだから、ある日代わりにアラ²⁾を入れておいたの。それを飲み干して、酔いつぶれたイエティを私たちは捕まえて、インドに連れていった。それから2日後、木の根でできた抱っこ紐を使ってソナムという名の赤ちゃんを抱えた雌のイエティが建設現場にやってきて、“ソナムのお父さんはどこ?”と叫んでいたよ。」

2020年1月某日、私はブータン王国(以下ブータンと称す)東部タシガン県のある村で、アビ³⁾(90代、女性)の話に耳を傾けて

いた。ブータンの土着信仰と自然観の関係について「聖なる森(sacred grove)」の調査を進めていた私は、調査を始めて早々に新たな森の住人の存在を知ることになった。そう、イエティである。

一般にヒマラヤの雪男として知られるイエティ⁴⁾は、ミゲ(*migoi*)やグレッドポ(*gredpo*)、グレットム(*gretmu*)という名でブータンでは知られている(筆者の調査地ではグレットムが用いられていたが、本稿では広く一般に知られているイエティの呼称を用いる)。ブータンのイエティ譚をいくつか紐解くと、その大きさはおよそヤク⁵⁾1.5~2頭分であり、顔を除き全身を覆う体毛は赤茶色から黒色、雌は大きな乳房を垂らし、標高およそ3,500m~5,000mの間に生息、単

* 京都大学大学院アジア・アフリカ地域研究研究科

- 1) 現在のアビの年齢と当時のブータンの道路開発状況(1961年より始まった第1次五ヵ年計画により施行)を考えると、アビの示す年代には誤差があるように思える。
- 2) ブータンの家庭で作られる蒸留酒。
- 3) 現地語(シャルチョップ語)で“祖母、おばあさん”を意味する。
- 4) イエティという呼称は元々、ネパールのシェルバ族の言葉に由来し[Snellgrove 1995: 214]、それが西欧の探検家やメディアを通して一般化したものである。
- 5) 体が長毛で覆われたウシ科の哺乳類。雄は体長3mを超えるものもある。

独あるいは夫婦で行動することがイエティの特徴とされている [Choden 1997: 10-11].

Deity or Yeti?

アビの話は続く。

「イエティとミルゴン (*milgon*),⁶⁾ そして虎. この3種類は重要な動物よ. とても危険だからね。」

一般に仏教国として知られるブータンではあるが、ブータン各地には山や湖、大木といった自然物に靈魂を見出し、仏教伝来以前から存在する土着信仰の姿が多くみられる。私が対象とする「聖なる森」もまた、土着信仰にルーツをもち、土地神 (Deity) の住まう神聖な土地として周辺住民に知られている森である。そして、筆者の調査地には、フラン・フラン・マ (*Phrang Phrang Ma*) と呼ばれる土地神の依り代^{よりしろ}である崖を中心とした「聖なる森」があり、イエティが存在するとされている (写真1)。

アビはイエティを「重要な動物」と説明した。しかし、筆者はここである問題に直面する。果たして、イエティは土地神が姿を変えて現前した化身なのか、それともただの動物なのか、それとも他の存在なのか？

調査地で話を聞いた村の高僧 (60代, 男性) は、「聖なる森」の内部に建てられた小屋で修行をしていた際、イエティを目撃した。彼は言う。「イエティはフラン・フラン・



写真1 イエティが住まうとされる「聖なる森」

マの化身であり、仏教の守護者である」と。また、農家のTN氏 (60代, 男性) によれば、イエティは「フラン・フラン・マの家畜のようなもの」であり、ただの動物であるとし、その一方で、ボンポ (*Bonpo*) と呼ばれる村の宗教的職能者であるR氏 (50代, 男性) は、イエティは「動物でもなく、フラン・フラン・マでもない」と答える。

ヒマラヤ地域で目撃されたイエティ譚を根拠にイエティを、①仏教修行者、②人間にとっての宗教的協力者、③友好的なイエティ、そして④山神の4つに分類するCapper [2012] に従えば、高僧の語るイエティ像は④に相似する。「仏教の守護神」という属性が、グル・リンポチェ⁷⁾によって調伏^{ちようぶく}され、仏教神格化された土地神に付随すると考えればさらに納得がいくだろう。しかしイエティが動物であるとするTN氏の語りや、動物でも土地神でもないとするR氏の

6) 体長は1 m程、顔を除き全身を覆う体毛は茶褐色、長い前髪と手を持ち、2,500 m以上の深い森に棲み、人間の物まねに長けていることが特徴とされる二足歩行をする生物。しばしばイエティと混同される存在である。ミルゴンについては稿を改めて論じたい。

7) ブータンに仏教をもたらしたとされる高僧。チベット仏教ニンマ派の開祖であり、ブータンを含むヒマラヤ地域で多くの土地神を調伏した存在として知られる。

語りに出てくるイエティはこの分類に当てはめることができない。イエティが友好的であれば、動物としてのイエティは③の区分に当てはまるだろうが、TN氏の語りの詳細がこれを否定するだろう。TN氏は、プー・ダニ (*phu dani*: “山猫”) と呼ばれるネズミ退治を得意とする森の生き物を呼ぶ儀礼において、その飼主であるフラン・フラン・マにプー・ダニを送ってもらうお願いをする必要があると語った。ある日、ひとりの男がプー・ダニの助けを借りたく、フラン・フラン・マにお願いしたが、間違えてプー・メメ (*phu meme*: “山爺さん”) と発話してしまい、翌日、男のところにはプー・ダニではなく虎が来て、作物を台無しにされたという。この話を聞いた筆者はTN氏に「虎が送れるなら、イエティも送れますか?」と聞くと、TN氏は答えた。

「もちろん送れるさ。でも、一体誰がイエティなんか呼びたいんだ!」

イエティはどこへ行ったのか

アビの話は続く。

「人々はダイナマイトを用いて山を削り、道路を作っていたもんだから、イエティもミルゴンもたくさん死んださ。生き残ったものは高く、深い山奥に逃げていったよ。」

「なぜ人々はイエティを見なくなったのか? (Why don't people see the yeti any more?)」

と題されたBBC [2015] の記事では、車道の開通によるモノの流入や、電気・ガスの利用ができるようになったことによる生活の変化が、イエティと遭遇する機会の減少につながっているとしている。では一体、イエティはどこへ行ったのだろうか?

N氏(70代、男性)は彼が15~16歳の頃、イエティの鳴き声をよく聞いたという。イエティはよく村の近くに来て、大きな木があるところに住みついていたと。筆者が滞在していた家のアジャン⁸⁾(40代、男性)は、イエティは至るところに以前はいたが、村の人間が増えたために、大きな山や森に逃げていったという。

T氏(60代、男性)の語りはこうだ。ある日、Y地区とD地区⁹⁾の力持ち (*mangsan*) が巨石を投げる力比べをした。この勝負に勝ったD地区の力持ちは、Y地区のイエティとミルゴンをD地区に連れていったため、それ以降この付近でイエティとミルゴンを見かけることはなくなったという。¹⁰⁾ 一方で、在家僧のY氏はこう語る。「以前は多くの人がイエティもミルゴンも見た。今はそうでない。グル・リンポチェが彼らを調伏したからだ」と。

果たして、人々がイエティに出会わなくなったのは、人々が森や山に行かなくなったからか? イエティが深い森や高い山に移動したからか? ダイナマイトで個体数が減少した

8) 現地語で“伯父”を意味する。

9) 筆者の調査地である村はU地区に属し、Y地区と同じ山の斜面に位置する。対して、D地区は河川を挟んだ対岸側に位置するため、U地区からもイエティとミルゴンが姿を消したとされている。

10) 同地区の伝承を収集したPommaret [2004: 52] は、力持ちではなく、両地区の土地神が投石による力比べをしたと報告しており、勝ったD地区の土地神は、Y地区の牛を含めた富を手に入れたとしている。

からか？グル・リンポチエによって調伏されたからか？それとも、彼らの世界からイエティがいなくなりつつあるからか？

筆者の滞在した村も含めて、ブータン村落地域の近代化に伴う影響は計り知れない。若者の農業離れ、寄宿制度による村の人手不足、農村地域の過疎化、空き家の増加、車道の開通、そして、世代間の伝統知識の格差の拡大。イエティ民話の伝承もまた、近代化の渦中にある。ある日、村でイエティに関する聞き込みを行っていた時、イエティの様相を知りたく、手持ちのスマートフォンのGoogleで「ゴリラ」と検索し出てきた写真を見せたら、「そう！これがイエティ！インドの動物園に行けば見れるよ！」と言われた。イエティは「聖なる森」に“かつてはいた”存在であり、今はインドの動物園の大きな檻の中にいる存在になりつつあるのかもしれない（写真2）。

イエティをめぐるのは、その特徴や属性、どこへ行ったかを含めて複数の異なる語りが見られることが分かっただろう。もっとも、筆者はイエティがいるか、いないかという話をしたいわけではない。むしろ、筆者は村人にとってイエティやミルゴン、土地神がどういった存在であり、彼らを通して自然とどのように関わってきたか／いるかに関心がある。イエティやミルゴン、土地神をめぐるブータンの王室や政府、仏教僧、村人といった異なるアクターが生成する複数の異なる語りとその構築過程に着目して、ブータンの土

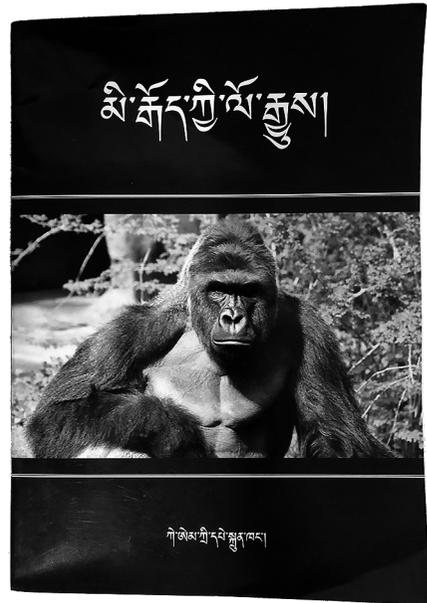


写真2 『イエティの物語 (mirgod kyi lo rgyus)』と題された本

着信仰と自然観の関係について今後も研究を続けていきたい。

引用文献

- BBC. 2015. <<https://www.bbc.com/news/magazine-34448314>> (2020年5月26日)
- Capper, D. 2012. The Friendly Yeti, *Journal for the Study of Religion, Nature, and Culture* 6(1): 71-87.
- Choden, K. 1997. *Bhutanese Tales of the Yeti*. Bangkok: White Lotus.
- Pommaret, F. 2004. Yul and Yul Lha: The Territory and Its Deity in Bhutan, *Bulletin of Tibetology* 40(1): 39-67.
- Snellgrove, D. L. 1995. *Buddhist Himalaya*. Kathmandu: Himalayan Book Sellers.

神からの贈り物

川 畑 一 朗*

おもちゃ行商の男性

南部アフリカ、ザンビアの首都ルサカの路上を歩いていると、通りの向こうから三輪車のおもちゃ（写真1）を走らせた男性が歩いてきた。カラフルな服を着た運転手が白い車体に座るそのおもちゃは、前輪とペダルが連動した仕組みであり、おもちゃの運転手が自らペダルをこいでいるように見えた。

この男性は手作りのおもちゃを売り歩き日銭を稼いでいる、行商のダウト氏（仮名）である。彼からこのおもちゃを購入した私は、ある晩おもちゃを眺めていた。何から出来ているのだろう。そう思いながら私はおもちゃの各部位を撫でまわした。

感触から推測するに、車体は金属製のワイヤーにペンキが塗られたもの、運転手の身体



写真1 路上を走る手作りのおもちゃ

は紙粘土のようなもので肉付けし、その上から衣類とペンキで装飾が施されている。紙粘土はどこから入手するのだろう。ワイヤーはまっすぐでないが、新品なのだろうか。多くの疑問で頭がいっぱいになった私は「おもちゃを作るところを見せて」と彼にメッセージを送った。

おもちゃ作り

私のお願いを快く承諾してくれたダウト氏は、自宅に私を招きおもちゃを作る工程を一から教えてくれた。まずはおもちゃの骨組みを作ることから始まる。骨組みの材料はやはり金属製のワイヤーであり、彼は鉄くずリサイクル業者から中古のワイヤーを購入していた。

ワイヤーは住居のフェンスに使われていたものや廃電線を分解したものなどのスクラップ品で、ルサカでは1キログラムあたり4クワッチャ（当時1クワッチャあたり0.07～0.08ドル程度）で手に入る。ダウト氏はペンチで中古のワイヤーを一度まっすぐに伸ばしてから、各パーツの骨組みを作っていた。タイヤと運転手の頭は指の湾曲を器用に使って円形に、他のパーツはペンチを使って角形に整えていた。

* 京都大学大学院アジア・アフリカ地域研究研究科

手際よくパーツを量産する姿に驚いた私が「これは誰でも作れるの？」と聞くと、ダウト氏は「そう多くはない。これらのおもちゃを作る技術は学校では教えてくれない。これは神からの贈り物なんだ」と得意げに答えた。彼は技術を才能だと捉えていると私はくみとった。

すべてのパーツの骨組みが完成すると、次は肉付けの工程である。「ワイヤーだけでは表現できない厚みをもたせるんだ。」そう言うと彼は、ダンボールに水を含ませてそれを両手で握りしめ、水気を取った。そして「ちょっと、ここで待ってて」と言い、彼は自宅の外に出て行った。

数分後、彼は隣人からもらったシマ(*nshima*)を片手に帰ってきた。シマはザンビアの主食であり、トウモロコシやモロコシ、シコクビエ、キャッサバなどを練り粥にしたものである。「お腹がすいたのかな」と思っていると、彼は家の奥から杵と臼を持ってきてそこにシマを入れた。次の瞬間、驚くべきことに彼はシマの入った臼に先ほど絞ったダンボールを入れ、杵でこね始めたのだ(写真2)。

どうやら私が紙粘土だと思っていたものは、今のような工程を経て作られる簡易粘土のようなものだったのだ。

ザンビア人はシマをこよなく愛しており、多くのザンビア人は毎食シマを食べる。そんなソウルフードを廃棄物のダンボールと混ぜ合わせることには、ザンビアでの生活が短い私から見ると少し抵抗があった。一方で、家族全員分を一度に作るシマは食後に残ること



写真2 シマとダンボールを入れた臼

もしばしばある。余りものを利用し材料費を抑えるという意味では、合理的な方法にも思えた。

シマとダンボールの色の境がなくなるくらいこねた後、ダウト氏は簡易粘土を運転手の骨組みにまとわせて、人型に整えた。「乾くのに天日干しで2~3日かかる。乾いたらペンキを塗るんだ。」そう言って、彼は簡易粘土をまと寄せた運転手4体を日当たりの良いところに並べた。確かにこのような特異な方法を思いつくのは才能かもしれない、そう納得した。

次に、彼はタイヤに手を伸ばした。家の奥から取ってきたビニール袋や古布をタイヤの骨組みに巻きつけ、鍋に火をかけ、タイヤをくべてプラスチックのつなぎ目を溶かし整えた。これで骨組みの肉付けは終了である。彼は、私に3日後に来るよう伝えた。

3日後私は彼の自宅を訪問した。「最後におもちゃを装飾するんだ。」彼はそう言って作業を再開した。乾いて固まった運転手の身体と車体、タイヤにペンキで色を塗り、安く手に入れてきた子ども用の衣類を切り縫

いし、運転手に服を着せた。その後、30～40分ほどでペンキが乾いたら最後に各パーツを針金でつなげておもちゃは完成である。

神からの贈り物

装飾のペンキが乾くまでの間、ダウト氏が「材料を集めに行く」と言うので、私は同行した。彼は家を出てすぐ近くの草むらに入って行った。ついて行くと、茂みには衣類やビニール袋、ペットボトルなどの廃棄物が投棄されていた。彼が骨組みの肉付けに使っていたビニール袋や古布、ダンボールは、路上廃棄物を再利用したものだった。感心して目を丸くする私に、彼はまた得意げに説明した。「僕のビジネスは、人が捨てたものを拾えばできるんだ」と。路上廃棄物は常に一定量落ちてはいるが、プラスチックがたくさん集まる時期とほとんど落ちていない時期とがあるようだ。誰かがいらないと捨てた廃棄物も彼からすると神からの贈り物なのである。

その後、彼の自宅に戻った私はペンキが乾ききるまでの間、彼のこれまでの人生について聞いた。御年 53 歳のダウト氏は隣国のジンバブウェやボツワナにも居住歴があり、おもちゃの販売はボツワナで失職した際に始めたのだという。ジンバブウェとボツワナでは、おもちゃの主材料のワイヤーでさえ拾い集められたが、ザンビアでは鉄くずひろいがビジネスであるため、そう簡単ではないらしい。ダンボールとシマの簡易粘土はジンバブ

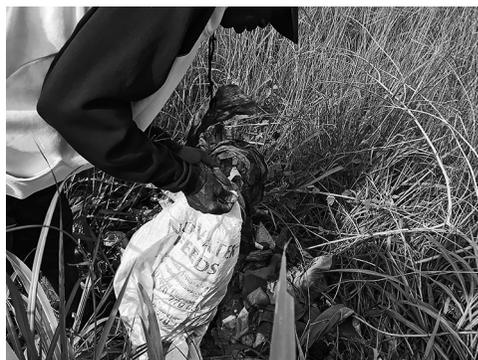


写真3 茂みからプラスチックを拾う

ウェに住んでいたとき、隣人が作っていたものをまねたそうだ。

「すごい、みんな天才だ」と私が言うと、彼は「生きていくには頭を使う必要がある。なぜなら、神は私たちに脳を与えたのだから」と言った。彼の言葉に私はハッとさせられた。彼がしきりに口にする「神からの贈り物」というのは、アイデアや技術ではなく、それを考える脳を指していることに気づいたからだ。彼が得意げだったのは自身の才能をおごっていたのではなく、それが考え抜いた結果だったからである。

手際のよい骨組みの作成はこれまでの長年の製作経験が成すものであるし、簡易粘土のアイデアも隣人の作製方法を応用できると踏んだ結果である。フィールドではそこに今ある結果だけで理解したつもりになるのではなく、そこに至るまでの過程も知り、自分自身で十分に吟味する必要があるようだ。なぜなら私たちに、神からの贈り物があるのだから。